

天一国時代を体現する祝福家庭となろう！

韓国・天正宮博物館で「HJ 天苑特別集会」

7月1日、韓国・清平の天正宮博物館で、真のお母様をお迎えして「天地人真の父母様主管 HJ 天苑特別集会」が行われ、清平聖地に拠点を置くさまざまな機関の責任者・スタッフが一堂に会しました。

真のお母様は、清平聖地で歩むメンバーたちが“孝”の心情文化において模範となることを願われながら、「孝情 (Hyo Jeong)」の頭文字をとって清平聖地を新たに「HJ 天苑」と名付けて祝福されました。

特別集会では、趙誠一世界本部長と安豪烈対外協力本部長が、アメリカご訪問を中心とした最近のお母様のご動静を報告。また、トーマス・ウォルシュ UPF 世界会長の証しの時間がもたれました。

その後、真のお母様がみ言を語られ、真の父母様から先駆けて祝福を受けた私たちのあるべき姿について強調されました (後ろにみ言全文)。

引き続き、天正宮博物館警護チームによるバンド「アップルヘブン」が登場し、心情文化讃美礼拝が行われ、参加者たちは与えられた愛とみ言に感謝をしながら、決意を新たに出発する恩恵深い時間となりました。

真のお母様のみ言

今日皆さんはどこに集まりましたか？ HJ 天の庭園、HJ エデンの園を実感しますか？

長い間、天の父母様が願って来られた一つの世界。人類が願ってきた夢も、真の主人に出会った真の父母を通した一つの世界。その世界に暮らしている人々の姿はどんな姿でしょうか？

過去6千年間、墮落した世界では想像もできなかった、天の父母様が天地創造をされ、人間を創造され、その人間を通した神様の夢がありました。聖書でいう6千年の歴史、今日は人類が待ち焦がれてきた、人類が願ってきた、真の父母によって真の位置に、子女の位置に出て行くことのできる、そのような祝福を受けた新たな摂理歴史の出発 (の時を迎え)、天一国の民として今大きく成長していています。

それならば、天一国の民、全世界 73 億人類が真



の父母様のみ旨を知って、侍る立場とならなければなりません。そのようになるまでは教えてあげるべきであり、リードしていくべきであるというのが、先に祝福を受けた私たち祝福家庭の責任です。

特にこの HJ 天苑を見ると、人類の前に地上天国、神様が夢見て来られた、エデンの園はこうであると言える (モデルとなるべきです)。そこに暮らす人々の姿は影のない正午定着した、一つとなった (姿となり)、数多くの群れがいて、一つの心、一つのみ旨として天の前に喜びと頌栄をお返ししながら、天の父母様が願う一つの世界を成していくために最善を

尽くしながら、一日一日祝福を受けた立場で、天の前に感謝をお返ししなければなりません。

そのようになれば、不協和音はありえません。自己中心の考えが出てくる訳もないのです。わかりますか？

皆さんは一つです。上下、高低にかかわらず、上の者も下の者も一つの目標です。それを皆さんは感謝の気持ちで成していくのです。天の前に受けた祝福は余りにも大きいのです。

実際、天一国の民として、その資格が備わった立場ではありません。しかし発展することのできる、

改善し得る、そのような場を、そのような通路を私が開きました。皆さんの不足な部分を満たすことのできる、継ぎ足すことのできる機会を与えています。

ですから皆さんはエデンの園の中心に暮らしているため、全世界の前にここで働き、生活している皆さんは中心モデルとならなければなりません。標準にならなければなりません。

すべての国の食口や世界の人々から「ああ、あの人のように行動して、生きればいいのだな」と言われるような姿にならなければならぬということをお話したいのです。そのようにしますか？

日本を復興させ、世界平和に 貢献する指導者育成を

宋総会長ご夫妻を迎えて宇和島家庭教会献堂式



6月末から7月前半にかけて、宋龍天・全国祝福家庭総連合会総会長は栃木、愛媛、徳島、岡山、兵庫などを巡回し、各地の教会を訪れて食口たちに真の父母様の愛と恩恵を連結しました。その中から、愛媛・宇和島家庭教会の献堂式の様子を紹介します。



- ① 献堂式が終わって記念撮影
- ② 説教を行う宋総会長
- ③ 教会プレートの除幕式
- ④ 祝歌を披露する青年学生部コーラス隊



7月2日午前、宋総会長ご夫妻は愛媛・松山空港から約1時間半をかけて宇和島に向かい、午前10時45分に宇和島家庭教会に到着。すぐに教会の献堂を祝うテープカットが行われました。

本式典では、朴明愚教会長が教会献堂に至るまでの経過報告を行った後、愛媛教区の聖歌隊「愛邦」や青年学生部コーラス「天声」など4組が祝歌を披露。さらに来賓の祝辞、全柱奉愛媛教区長と北谷真雄第10地区長の挨拶と続きました。

次に李海玉総会長夫人が登壇し、「これほど自然の美しい宇和島の食口は、本当に幸福な人達です。愛を实践し、愛媛を愛し、宇和島を愛し、天の父母様を証しする宇和島家庭教会の食口となることをお祈りします」と祝福の言葉を贈りました。

最後に宋総会長は、吉田松陰が開いた松下村塾跡（山口県萩市）を訪れたエピソードを紹介しながら、食口たちを激励しました。

「松下村塾跡は、予想以上に小さな建物でした。わずか3年の間に、そこから多くの優秀な門下生が排出され、

後に明治維新の主役となり、日本がアジアにおいて最初の先進国となるための礎を築いていきました。

では、最も小さい教会の一つである宇和島家庭教会の献堂式を天はどう見ておられるでしょうか。天はこの教会から、日本を復興させることのできる、全人類が求める平和な世界へと導くことのできる指導者が輩出されることを願っておられます。『愛天愛人愛国』を实践する偉大な指導者がこの教会から生まれることを信じています」

献堂式の修了後、宋総会長ご夫妻は、参席した食口一人ひとりと握手し、特に高齢の食口とは抱擁したり、一緒に写真を撮りながら、愛を尽くしていきました。

宇和島家庭教会に初めて宋総会長ご夫妻をお迎えすることができ、真の父母様の深い愛を感じながら、多くの食口が感動のあまり涙を流していました。

氏族伝道の証しを立て、 お母様をお迎えしよう！

徳野会長ご夫妻を迎えて静岡家庭教会入堂式

徳野英治会長は6月末から7月初めにかけて、鹿児島や沖縄、静岡など各地を訪れ、家庭連合のビジョンや氏族伝道の意義などについて熱く語りました。その中から、静岡家庭教会（静岡市）の入堂式の様子を紹介します。



7月3日、徳野会長ご夫妻をお迎えし、静岡家庭教会入堂式が盛大に挙行され、地元議員など多くの来賓を含む300人以上の人々が集まりました。

第一部のテープカットと建物の聖別式に続き、第二部の入堂記念礼拝では、今までの静岡家庭教会の歩みを振り返る映像と共に、副島祥司副教会長が入堂にいたる経過を報告。

入堂式が行われる7月は、2014年10月に徳野会長をお迎えして外部で1000名大会を開催してから21カ月目にあたることや、昨年静岡の地では徳川家康公顕彰400年を祝う一方、教会では400年歴史を摂理に連結する為の還元祈願礼式が行われ、その土台の上で家庭連合の名称変更によりもたらされた天運により今回の物件との出会いがあったこと、また今年3月に宋龍天総会長の東静岡教区巡回により祝福を受けてちょうど40日目に契約がなされたことなど、天の導きの中で入堂式に至った経緯が紹介されました。

刑部徹第6地区長の主催者挨拶の後、徳野久江会長夫人が「氏族に堂々と誇ることができる素晴らしい教会ができました。お母様が日本に来られた時に教会にお迎えすることを皆様の目標とされ、健康に気をつけて頑張ってください」と激励の言葉を贈りました。

徳野会長は入堂記念メッセージの中で、自らの氏族伝道の証しを交えながら、家庭連合が何を目指しているのかを5項目に整理して解説。①為に生きる（より大きな目的の為に生きる）②個人の救いではなく家庭の救いを中心③他の宗教を否定しない（超宗教）④国際結婚によって怨讐を超える（超国家）⑤宗教は手段であって目的ではない（家庭連合の目的は宗教を無くすこと）——など他の宗教と家庭連合の違いを比較しながら、一般の方に



- ① 静岡家庭教会の外観
- ② 記念メッセージを語る徳野会長
- ③ 玄関前で行われたテープカット
- ④ 入堂式に集まった教会員

も分かりやすく語りました。その上で、「勇気と度胸をもって、氏族伝道の素晴らしい証しをこの静岡家庭教会から全国に発信してまいりましょう」と集まった食口たちを激励しました。

祝祷の後、億万歳四唱が行われ、恩恵に満ちた式典は幕を閉じました。式典後は、黄鼎禹東静岡教区長ご夫妻が、食口一人ひとりに記念品を手渡し、精誠を尽くしてきた食口に感謝の気持ちを伝達。大きな礼拝堂は初日から溢れかえり、今後の発展を予兆させました。

家庭・地域集会を基盤にして伝道推進

第3地区で伝道会議を開催



- ①第3地区の伝道会議の参加者
- ②講話を行う徳野会長
- ③伝道の方針を語る矢野局長
- ④報告を行う五十嵐第3地区長



西埼玉教区大宮家庭教会で6月23日、本部より徳野英治会長、伝道教育局の矢野治佳局長、篠崎幸郎伝道部長、高坂陽一伝道企画部長を迎えて、第3地区(埼玉、栃木)の伝道推進本部長(牧会者)、副本部長(伝道部長・婦人代表)、推進委員(伝道団)ら120人が参加し、伝道会議が行われました。

会議は、第3地区の菊池満晴青年部長の代表報告祈禱に続いて、五十嵐政彦第3地区長がパワーポイントを使って第3地区の伝道の状況を報告。「この時に伝道推進本部が設置されたのは、摂理であり機会です。今度こそは機会を絶対に逃しません」と力強く宣言し、来年の基元節祝福式に向けた地区としての計画を示しました。

その後、教区、教会ごとに伝道勝利のために現場で取り組んでいる内容の報告がありました。参加者からは「今まで教会の伝道の取り組みを詳しく聞く機会があまりなかったの、とても刺激を受けた」という感想が多くありました。

続いて矢野局長が、伝道推進のための重要ポイントを

解説。伝道対象者との信頼関係をつくるための「家庭集会」や、課題を持つ人をみ言で価値転換させる「食口化教育」などについて分かりやすく説明しました。

徳野会長は、アメリカ家庭連合の責任者の一人、ダン・フェッファーマン氏が制作した2曲の歌と映像がお母様のアメリカに対する悲しみを慰められたという宋総会長の報告を紹介。「お母様は、6月5日にニューヨークで開催されたヤンキー大会40周年記念大会でアメリカ再生の希望を感じられました」と語りました。

また徳野会長は、お母様がハワイで4日間続けて首まで海につかって祈り、特別な精誠条件を立てられたと述べました。

最後に徳野会長は、伝道に必要な項目として、①家庭集会・地域集会に本腰を入れる②新規のイベントは定期的に効果的に行う③修練会で価値転換をする④祝福結婚を勧める⑤礼拝を重視する——ことなどを強調しました。

被災地が活気を取り戻すまで寄り添う

UPeace、熊本、東北で活動継続



- ①インタビューに答える加藤キャプテン
- ②熊本・阿蘇家庭教会前で行った炊き出し
- ③熊本の被災地で引っ越し作業を手伝う UPeace メンバー

世界平和統一家庭連合 平和ボランティア隊「UPeace」は、熊本地震が4月に発生したのを受け、最初の地震発生からおおよそ10日後に災害ボランティアチームを現地に派遣。現在も熊本の被災地支援を続けています。5年以上継続している東北・宮城での支援活動を含め、UPeaceの活動について加藤善斐徒キャプテンに聞きました。

——熊本の被災地での活動について教えてください。

熊本県熊本市、益城町、南阿蘇村を中心に、被災した家屋の家財の片付けや運び出し、引越しの手伝いなどを行ってきました。参加者は延べ200人を超え、90カ所以上の現場で活動しました。

現在は、被災地近隣のメンバーたちは活動を継続していて、遠方からの参加希望者に関してはUPeaceのホームページで募集しています。

——現在の熊本の様子はいかがですか。

被害が局部的だったこともあり、被災地から少し離れたと元に戻りつつありますが、被害の大きかった地域ではまだ車中泊をしている方もいて、地域によって復興のスピードが全然違います。特に被害が大きかった地域は、仮設住宅が完成していないところも多いようです。

被災地の方々の心境としては、まだ「戦っている」という思いを持つ方が多いと思います。

——今後の活動についてお話しください。

私たちはボランティアセンターを通して活動すること

が多いですが、ニーズがなくなるまでボランティアセンターは閉鎖されません。私達も現地で困っている方々がいる限り、活動していきたいと考えています。

ただ、瓦礫の片付け等が終わると、その次にはコミュニティの再生や、街の活気を取り戻すという段階になります。熊本は観光都市でもあるので、「震災前よりも良い街」に一日でも早くなれるようボランティアとして手を差し伸べていければと思います。

東北では、東日本大震災から5年以上が経過した現在も、「被災地の活気を取り戻す」ことをテーマに活動を継続しています。

最近は農業支援や漁業支援、イベントや行事の手伝い、慰問活動、他団体が企画したプロジェクト支援など、その地域のニーズに合わせて様々な活動を行っています。参加者は延べ2000人を超え、600カ所以上の現場で活動しました。現在は、月に1回～2回のペースで活動しています。

街が立ち直ってきている今、東北の方が危惧しているのは「震災の風化」です。被災地では、震災遺構と呼ばれる、震災の記憶を止めようという動きが高まっていることもあり、観光することで被災地を支援したり、学校教育としてバスツアーを組んだり、という取り組みが積極的に行われています。

UPeaceでは今後も、熊本や東北の迅速な復興のためにボランティア活動を継続しますので、多くの方々の参加をお待ちしています。

“祝福理想を成就する天の誇らしい息子娘となります”

韓日・日韓国際祝福家庭礼拝に 126 人が参加



真の父母様は生涯にわたって、神様を中心とした人類一大家族世界を成し遂げるために投入してこられました。その摂理の核心がまさしく人種や国境を超えた国際祝福結婚です。

しかし、サタン主管圏の下で祝福家庭として歩むことは容易ではなく、国際祝福家庭として勝利するためにはさらに多くの困難が伴います。

そんな中、神様のみ旨と真の父母様の心情を知った統一食口たちは、国際祝福という険しい道をあえて選び、故郷と祖国を離れることを厭わず、天国建設のために勇敢に挑戦してきました。

全世界には数万組の国際祝福家庭があり、日本にも多くの国際祝福家庭があります。家庭連合時代を迎えた今、宋龍天・李海玉総会長ご夫妻の指導のもと、国際祝福家庭が天の心情をもう一度悟り、その願いに応えるため新たに立ち上がることになりました。

去る6月2日、李海玉夫人を迎えて東京・高尾山で山上祈禱会を開催。そして7月9日、在日韓国婦人会主催の韓国語礼拝が、千葉県市原市内にあるクリスチャンで在日韓国人の会社社長所有の別荘で行われました。

韓国語礼拝には、雨が降りしきる中、首都圏を中心に遠くは九州や名古屋、東北地方から、韓国人壮年61人、韓国人婦人65人の合計126人が参加。その中には、教会から足が遠のいていたメンバー10人余りも含まれ、新たに出発する機会となりました。

在日韓国婦人会の姜京熙会長の司会で行われた礼拝は、代表して2人が真の父母様へ思いを心情深く証した後、李海玉夫人が説教を行いました。



①韓国語礼拝の参加者
②説教を行う李海玉夫人
③盛り上った第2部の和動会

その中で李海玉夫人は、父母様に代わって参加者を慰労・激励しながら、国際家庭として進むべき道を訴えました。

韓国語だけで聴くメッセージを通して、参加者たちは、時には涙を流し、時には大声で笑いながら、その場にいる全員が天の父母様と真の父母様の愛と心情の中で完全に一つとなり、新たに生まれる時間となりました。

教会に行きたくとも行けず、天を慕う思いを募らせてきたある参加者は、父母様にお会いしたい気持ちがあふれ出し、その場で号泣。そうした状況を目の当たりにしながら、参加者全員が一つの家族としてお互いを理解し、助け合いながら、真の父母様が国際家庭に望んでおられる願いを悟り、天の前に恥じない誇らしい息子娘となっていくことを改めて決意しました。

第2部では、竹内啓晃・青年学生局副局長が二世圏の祝福について詳しく説明。参加者たちは、天の祝福を私たちの二世圏に連結していくことの重要性を再認識する時間となりました。

最後に和動会を通して、全体が心をつなげる時間を持ちながら、こうした集いを首都圏だけではなく全国的に広げていくことで参加者たちは一致しました。

平和を繋ぐ市民プロジェクト “PEACE ROAD 2016” 始まる

「国境のない世界」の出発点に



①東京で行われた中央実行委員会発足式（6月20日） ②宗谷岬平和公園に集まった関係者（6月25日、北海道稚内市）
③支援者に見送られるライダー（6月26日、北海道釧路市）

日本各地を自転車などで走行し、「韓（朝鮮）半島の平和的統一や世界平和の実現への思い」を繋ぐ市民参加プロジェクト「PEACE ROAD 2016 in Japan」（主催・同実行委員会）の中央実行委員会発足式が6月20日、東京都内で行われました。

発足式は、魚谷俊輔 UPF 日本事務次長の司会で進行し、日本と韓国の国際結婚で結ばれた韓国婦人会による祝歌、徳野英治 UPF 日本会長による歓迎の辞に続いて、昨年の PEACE ROAD の様子をまとめたビデオ「平和の旅 2015 PEACE ROAD」が上映されました。

実行委員長には満場一致で遠藤哲也・元日朝国交正常化交渉日本政府代表が選出されました。

その後、昨年の PEACE ROAD にライダーとして参加した男女2人の青年のスピーチがあり、その中で、K・T（男性）さんは「2020年にはこの東京でオリンピックが開催されます。諸外国から来られる様々な方々に、私たちが PEACE ROAD を通じて得た経験を活かし、世界に誇れる『おもてなし』をする青年としてオリンピックを支えていきたい」と抱負を述べました。

またN・Nさん（女性）は「『自転車で走るだけで、平和が実現できるのだろうか』と疑問に思われる方もいらっしゃると思いますが、年々参加者が拡大して多くの

方が支援、応援をして下さっています。平和のために自転車で縦走する姿を見た方々の心に何か響いているのは間違いのないのではないのでしょうか。PEACE ROAD に参加して体験した小さな絆は『国境のない世界』の出発点です」と訴えました。

今年の PEACE ROAD は、8月中旬まで日本各地で行われます。

北海道・稚内からライダーが出発

PEACE ROAD 2016 in Japan の最初の自転車走行が6月25日、北海道の稚内市内の宗谷岬平和公園で行われました。66年前に朝鮮戦争（韓国動乱）の発生したこの日の早朝5時、平和を願う日として稚内、札幌、旭川から駆け付けた50人余りのサポーターたちに見守られて、雨交じりの強風の中 PEACE ROAD のライダーたちが力強く出発しました。

前日には、同公園で前夜祭があり、金源植 PEACE ROAD 中央実行委員会事務局長の挨拶の後、平和コンサートが行われました。この式典は、1983年9月1日にサハリン沖辺りで起きた大韓航空機撃墜事件と平成28年熊本地震の犠牲者の追悼も兼ねて行われました。

パラグアイ副大統領が レダ基地を視察

自らタロイモを切り出し、パクーの稚魚を放流



真の父母様から使命を託され始まった日本人国家メシヤによる南米パラグアイのレダ開拓摂理。“神の国”のモデルづくりを目指し、貧困問題や環境保全などに取り組み続けて17年目を迎え、現在では地元の地域はもちろん外国からも高い評価を受けるまでに至っています。今回は、6月末にファン・アフアラ副大統領がレダを視察した様子を紹介します。



6月30日午前9時前、アフアラ副大統領一行約20人を載せた海軍機2機が、無事にレダに到着しました。今年5月、副大統領は放流式出席のためレダ上空までやって来ながら、雨のため着陸できず、涙をのんで引き返した経緯があります。今回、副大統領には国会議員8人や地方自治体の首長が同行しました。

真のお父様が命名された「南北米福地開発協会」（中田欣実理事長）が管理するレダ基地では、同協会現地財団法人の中田実理事長の歓迎の挨拶に続いて、佐野道准理事がレダ摂理についてパワーポイントを用いて説明しました。

佐野理事は、真の父母様が南米、とりわけパラグアイを非常に重要視して内外の準備をされ、その基盤の上で日本人国家メシヤがレダ開発を託されたことを紹介。そ

の上で、レダ開発の意義と価値や地域社会への貢献について報告しながら、貧困問題をはじめ、環境破壊や食糧の問題の解決に向けた取り組みが、レダを中心に根付き始めていることを強調しました。

副大統領一行は、レダ開発は真の父母様の思想を具現化する試みであることを理解し、真の父母様に対して強い関心を抱くようになりました。

一行は研修所の施設を見学した後、車に分乗して敷地内を回り、レダ基地の所長を務める中田理事長から現在レダで展開されている各種プロジェクトについて説明を受けました。

特に、タロイモ畑（第1農場）とパクーの養殖場、小橋製品開発部の食品加工場では、一行は時間をかけて詳しい説明を受けたり、加工食品などの試食をしました。

視察の途中、アフアラ副大統領が、同行した国会議員たちにレダ開発の重要性について力説する姿を日本人スタッフたちは印象深く見つめました。

昨年もレダを訪問したアフアラ副大統領は、レダが年々発展していることを称賛。特に、タロイモ畑では、一つの親芋から20キロの芋が取れることや、有機栽培で1年中収穫可能で栄養価が非常に高い点などに注目していました。

副大統領は自らタロイモを切り取って生のままかじり



- ① 修練所のベランダで記念撮影
- ② レダ開発の重要性を訴えるアフアラ副大統領
- ③ 挨拶する中田理事長
- ④ レダ摂理について語る佐野理事
- ⑤ タロイモを切り出したアフアラ副大統領
- ⑥ 食品加工場も視察
- ⑦ パクーの稚魚を放流するアフアラ副大統領
- ⑧ 人になついているカピバラたち

ながら、「自分はタロイモの父になって広めたい」と熱い思いを吐露。また「タロイモから粉を作るプロジェクトは人類の飢餓克服につながる。粉を作る機械を提供したい」と語りました。

また副大統領は、パクーの孵化や放流にも強い関心を示し、「レダはパクーとタロイモの事業をやるだけで十分価値がある」と強調。国会議員たちも、資源保護とパクー増産につながる放流の重要性に大きな期待を抱いていました。

昼食をとった後、アフアラ副大統領一行は、釣りに行ったり、食堂で話し込んだり、テラスでゆっくりくつろいだりと思い思いに過ごしました。中田理事長は、副大統領とじっくり話ができて、とても有意義な時間だったと話

していました。

今回、パラグアイ教会からもリーダー2人が参加し、国会議員の渉外を行いました。参加した国会議員全員がレダ開発に非常に感銘を受けるとともに、プロジェクトの創設者である真の父母様に対しても関心を強め、お父様の自叙伝を受け取っていました。

これまでレダ基地を訪れた多くのVIPの中で、今回の視察団はレダ開発について最も本質的に理解していたという点で、とても大きな意義がありました。

レダ開発に大きな希望を見出した副大統領一行は、日本側との今後の連携に期待をしながら、レダを後にしました。

北大阪、西東京、愛媛などで 自叙伝「心の書写会」

7月に入ってから、各地の教会で浅川勇男先生を迎えて真のお父様の自叙伝「心の書写会」が開催され、参加者は多くの恵みを受けました。

7月8日、北大阪教区は「第30回 心の書写会」を守口市内の会場で開きました。その中で、浅川先生は「神様と私たちは、父と子の関係」と題して講演。「人生において最も大切な物、それは柱です。夫婦、親子、嫁と姑、家族の中に柱があれば不幸にはなりません」と語りました。参加者は感謝の心を持って書写を行い、神様との親子の関係を深めていくことを決意していました。

同11日には、西東京教区が東京都調布市内のホールで「自叙伝書写 感謝の集い」を開催。書写を通して伝道につなげる集いも今回で40回目を迎え、500人会場の約半分が新規のゲスト240人で埋まりました。

同12日、愛媛教区松山家庭教会で「心の書写会」が午前と夜の2部にわたって開催され、愛媛教区の他の3家庭教会でインターネット中継を通して参加した90人を含め、合計300人が参加。浅川先生の講話の後、今月のみ言「自然は私になり、私は自然になる」を真心込めて書写しました。



愛媛教区の「心の書写会」で書写を行う婦人

「第3回関西圏大学生フォーラム」を開催

7月3日、「第3回関西圏大学生フォーラム」が大阪市内で開催され、第9地区(大阪)、第15地区(京都、奈良、三重、滋賀)、CARPから組織の垣根を越えて、約80人の大学生が集いました。

フォーラムでは、「共産主義による脅威と日本共産党の歴史と正体」をテーマに、学生代表によるプレ

ゼンテーションや各大学別でのディスカッションを実施。参加した学生たちは積極的に議論を交わしました。また、18歳以上の若者の政治意識向上に関する取り組みや、今後の各大学キャンパスにおける活動計画なども話し合われました。



関西圏大学生フォーラム集まった学生たち

教区一丸となって神氏族 メシヤ勝利に向け出発—岡山

7月2～3日、岡山教区で第24回「神氏族メシヤ修練会」が開催され、全体234人(夫婦52組)が参加しました。今回の修練会は、青木大岡山教区長の指導のもと、全教会の牧会者・婦人代表が参加するなど、各教会の多くの祝福家庭が神氏族メシヤとして教育を受け、教区全体が一丸となって出発する機会となりました。

1日目は、篠崎幸郎講師による伝道講座と多田聡夫講師による家庭教育講座を実施。伝道に向かう姿勢や具体的な取り組み、家庭教育の重要性など、神氏族メシヤ出発の土台となる講義が行われました。

2日目の午前中は、佐々木一成講師の神氏族メシヤ講座を、日曜礼拝のみ言として教区内の全教会にインターネット配信。修練会に参加できなかった食口たちも共に神氏族メシヤとしての決意を新たにしました。

ました。

午後からも、神氏族メシヤの意義と価値のほか、愛天愛人愛国の生活改善運動、神氏族メシヤ活動の今後の展開、各地での模範的な事例などが紹介されました。



神氏族メシヤの宣誓式(岡山家庭教会)

沖縄で「ファミリーフェスティバル2016」

6月26日、沖縄県浦添市内のホールで、「ファミリー・フェスティバル2016」が盛大に開催され、新規ゲスト103人を含む約700人が集まりました。

徳野英治会長は基調講演で、急激に進む少子高齢化と家庭崩壊の危機について分かりやすく、要点を押さえて説明。笑いあり、涙あり、感動ありで、目からうろこが落ちるような内容の徳野会長の話に、会場中が引き込まれて聞き入っていました。

第2部では、徳野会長ご夫妻と永井義行第13地区区長が抽選会を盛り上げ、フェスティバルの勝利に花を添えました。

参加者からは「徳野会長のお話は分かりやすく、面白く、とても為になりました。やはり平和世界は家庭からだとなりました」(新規の女性)、「家族の大切さ、夫婦の愛を育てて子女をもうけることの意義を再確認できました」(宜野湾・男性)といった感想が聞かれました。



沖縄で行われたファミリー・フェスティバル